

サッカー選手の性格特性の比較分析

A comparative analysis of soccer players' personality

1K04B212-6

丸山 淳

指導教員

主査 山崎勝男先生

副査 堀野博幸先生

目的

私はサッカーを始めて14年になるが、その間でGK以外のポジションは経験してきた。現在はMFでプレーしている。では何がきっかけでポジションを変えてきたのだろうか。それは自分の内面、特に「性格」にあると考える。

サッカーには主に4つのポジション(GK, DF, MF, FW)がある。それぞれのポジションにはそれぞれの魅力があると思う。現在プレーしているポジションは自分が好きなプレーや快感に思えるプレーができる、そういったポジションでプレーしているのではないだろうか。

日本サッカー協会には「ストライカー&GKプロジェクト」という選手強化メニューがある。そこではストライカーのトレーニングメニューは、最初に計画はするが、いざ始めると、途中で内容がその時の「ひらめき」で変わってしまうことが多々ある。

ただ、支離滅裂というのではなく、その時の感性で選手に働き掛けて成長を促す。

GK側は決められた通りにトレーニングが進行する。

以上のような例から見てもサッカーのそれぞれのポジションにおいて内面、性格の部分というのは異なっているのではないだろうか。

よって、この研究では選手の身体的特性ではなく、内面、性格に関して調査を行う。そしてそれぞれのポジションによって性格特性を調査、比較する。

それぞれのポジションに求められる特性を知ることにより、その選手により適したポジションを判断できるようになるのではないかな。

そして、自分が一番適したポジションでプレーすることにより、その選手の能力を十分に発揮できるのではないかと考える。

方法

被検査者:新関東フットボールリーグに所属するチームから80人に依頼。

検査方法:YG性格検査(矢田部ギルフォード性格検査)を用いる。

YG性格検査とは、J.P.ギルフォード(南カリフォルニア大学教授)が考案した性格検査モデルを矢田部達郎(元京都大学教授)、辻岡美延(関西大学名誉教授)、園原太郎(京都大学名誉教授)らが日本人向けの性格検査として構成し、妥当化、実用化を経て完成させたものである。

表2 12因子

抑うつ性	気分変化	劣等感	神経質
主観性・客観性	協調性	攻撃性	活動性
のんきさ	思考性 (内向・外向)	支配性	社会性 (外向・内向)

結果

それぞれのポジション、チームで20名ずつ計80人に被検査者として、YG性格検査を行った。ポジション、チーム(トップチーム、Bチーム、Cチーム、Dチームの4チーム)それぞれ12因子の項目ごとに平均点を算出した。そこからそれぞれのポジション、チームで相違点や目だった傾向などを分析、比較する。

考察

今回の検査では、ポジション別、チーム別共に特に大きな相違点を見つけることはできなかった。しかし、全体的にCo(協調性)のポイントが低かった。これはポイントが低ければ低いほど協調性があることになる。やはりサッカーというチームスポーツにおいて協調性は一番大切な要素の中の一つではないだろうか。また、今回の検査はサッカーサークルに所属するプレーヤーを対象に行ったが、体育会の選手、もしくはリリーガーなどで行ったらまた違った結果が得られたのではないであろうか。さらには日本のプレーヤーではなく、海外のプレーヤーを対象に行えば、さらに違った結果となったであろう。ポリバレントという言葉を取りあげたが、海外ではそのようなプレーヤーよりも何かに特化しているスペシャリストが多いと思う。だから今回と同様の検査を行えば、ポジションごとで大きな差が出たのではないだろうか。逆を言えば、日本にはまだまだ何かに特化したスペシャリストが少ないからポリバレントプレーヤーなるものが求められるとも言えるのではないだろうか。極端な例を挙げれば、ブラジル代表のロナウジーニョがサイドバックをできる必要性は全くないのである。

今後の日本サッカーの進歩、発展のためにはこういったスペシャリストの誕生が必要不可欠であると考え

推測ではあるが、こういった日本のポリバレントプレーヤーと海外のスペシャリストの差が今回の結果にも表れたのではないだろうか。